

英語における未来時を表す進行形の意味

The Meanings of the English Progressive with Future Reference

松 井 真 人

Mahito Matsui

要旨: 英語には未来時を表すための様々な表現手段があり、それぞれの形式の意味には未来時に対する異なる捉え方が含まれている。本稿では特に、be going to、現在進行形、未来進行形という、進行形 (be -ing) を含む未来指示の形式を取り上げ、まず、各々の形式の意味を記述文法的な視点から説明した。さらに、各々の形式と意味が結びついている理由 (動機づけ) を認知文法的な視点から考察し、各々の形式の意味は、それらの形式を構成している動詞 go、進行形、法助動詞 will の意味に動機づけられていることを示した。

キーワード: 未来時、認知、be going to、現在進行形、未来進行形

1. 序論

Jespersen (1931: 2) の定義によると、時制 (tense) とは、時間関係を表すための動詞の形式のことである。英語には現在時と過去時 (あるいは非過去時) を示す動詞の形式 (屈折) は存在するが、未来時を示す動詞の形式は存在しない。したがって、Jespersen をはじめ多くの研究者は、英語には現在時制と過去時制は存在するが未来時制は存在しないと考えている (安藤2005: 68-69, Jespersen 1931: 3, 柏野1999: 1, Quirk et al. 1985: 176)。それに対して、Declerck (1991: 110-111) のように、will[shall] を、未来時制を表す助動詞と見なす考えもあるが、will[shall] は純粋に時だけを表すのではなく、法的な意味も表す。また、次章で詳しく述べるが、will[shall] が未来時を表すという場合でも、実際は話者の現在時における「予測」を表しているのであって、純粋に未来時を示しているのではない。これらの理由から、本稿では Jespersen らの考え方に従って、英語には未来時制は存在せず、現在時制と過去時制があると考えられる。

しかし、英語には未来時を表すための手段がいくつかある。そして、それぞれの形式は、未来に対する独特の捉え方を表現している。そのような形式の中に、be going to、現在進行形、未来進行形のような進行形 (be -ing) を含む形式がある。認知文法では、現在単純時制や法助動詞 will を用いた未来指示表現についての分析はこれまでなされてきているが、未来指示の進行形の意味分析は十分なされていない¹⁾。そこで本稿は、まず各々の未来指示の進行形が持つ意味を記述文法的な視点から説明したのち、なぜそれらの進行形がそのような意味を持ちうるのかということ、認知文法的な枠組みで明らかにすることを試みる。

¹⁾ 認知文法における未来時を指示する現在単純時制や法助動詞 will については、Langacker (2007, 2008: 300-309, 534-535, 2009: 185-218) を参照。

2. 英語における未来時を表す進行形

2.1 be going to

英語には未来時を表すための形式が多くあるが、Leech (2004: 55) はその中でも重要な形式として、「will/shall + 原形動詞」、be going to、現在進行形、単純現在時制、未来進行形を挙げている。本章では、これらのうち、本稿で扱う進行形を含む形式の意味について記述文法的な視点から説明する²⁾。

まず be going to の意味について述べる。Leech (2004: 58) は、この形式には「現在の状況の結果としての未来」(FUTURE AS OUTCOME OF PRESENT CIRCUMSTANCES) という意味があると述べている。そして、この一般的な意味は、文脈によって、(1a) のような「現在の意図の未来における結果」(THE FUTURE OUTCOME OF PRESENT INTENTION)、あるいは (1b-c) のような「現在の原因の未来における結果」(THE FUTURE OUTCOME OF PRESENT CAUSE) という意味になるという。前者の意味になるのは、人間主語で、意図を意識的に行使することを含意する動作主動詞 (agentive verb) の場合であり、後者の意味は、動物主語の場合も無生物主語の場合もあり、また動作主動詞の場合もあれば非動作主動詞の場合もある。後者の意味の場合には、話者は現在の証拠や知識に基づいて予測をしているということになる (Declerck 1991: 114)。

- (1) a. 'What are you going to do today?' 'I'm going to stay at home and write letters.'
 b. She's going to have twins. (i.e. 'She's already pregnant')
 c. I think I'm going to faint. (i.e. 'I'm already starting to feel ill') Leech (2004: 58-59)

つまり、be going to は未来の出来事を引き起こす意図や原因が既に存在しており、その出来事に向かって状況が進んでいることを表す。

2.2 現在進行形

次に未来時を表す現在進行形の意味を見ていく。Leech (2004: 61) によれば、現在進行形は、be going to と同じように、現在において予期されている未来の出来事を表すが、その両者には微妙な意味の違いがある。2.1で述べたように be going to は現在の「意図」や「原因」が引き起こす未来の出来事を表しているが、現在進行形が表しているのは、現在の「計画」や「取り決め」(arrangement) から予期される未来の出来事である (Declerck 1991: 92)。3.1で見る単純現在時制の予定未来の用法とは異なり、現在進行形の場合は、主語の指示対象が未来の状況に対して制御 (control) を有するという含意がある (Declerck 1991: 92)。(2)を見てみよう。

- (2) a. She's getting married this spring.
 b. The Chelsea-Arsenal match is being played next Saturday. Leech (2004: 61)

(2a) は結婚することがすでに決まっており、(2b) はサッカーの試合が行われることがすでに決まっていることを示している。

²⁾ この他に未来時を表す形式としては、「be about to + Infinitive」、「be on the point of Ving」、「be destined to + Infinitive」、「be to + Infinitive」や、can, may, must, should, might などの法的意味を含む助動詞がある。これらの法助動詞は、He can/may/must/should/might come tomorrow のように tomorrow と共起可能である (Leech2004: 70, 安藤2005: 69)。

be going to と現在進行形の違いは、(3) のペアに現れている。

(3) a. I'm going to take Mary out for dinner this evening.

b. I'm taking Mary out for dinner this evening.

Leech (2004: 62)

be going to が用いられている (3a) は、「意図」という心の状態を表しているのに対し、現在進行形が使われている (3b) は、心の状態とは関係なく、メアリーを食事に誘うことが前もって決まっていることを示している。したがって、取り決めに基づく未来の状況を表す現在進行形は、(4) のように、言い訳をする際に用いることができる。

(4) I'm sorry, I'd love to have a game of billiards with you, but I'm taking Mary out for dinner.

Leech (2004: 62)

2.3 未来進行形

次に、未来進行形「will/shall + 進行形」の意味について述べる。未来進行形には2つの用法がある。その一つは、基本的な用法と呼ぶことができるもので、(5) のように、進行相を持つ「進行中」(in progress) という意味に従って、未来の特定の時点において、何かが進行中であるということを表す (Leech 2004: 66, Swan 2005: 195)。

(5) a. This time next week they will be sailing across the North Sea.

b. Don't phone me at 7 o'clock – I'll be watching my favorite TV programme.

Leech (2004: 66)

未来進行形のもう一つの用法は、進行相を含まない用法で、Leech (2004: 67) はこの用法を「当然の未来」(FUTURE-AS-A-MATTER-OF-COURSE) と名づけている。(6) を見てみよう。

(6) a. I'll be writing to you soon.

b. When will you be moving to your new house?

c. Next week we'll be studying Byron's narrative poems.

d. The parties will be meeting for final negotiations on July 25th.

Leech (2004: 67)

Leech (2004: 67) によると、これらの文の未来進行形は、予測された出来事が関係者の意志や意図とは無関係に起こるだろうということを表している。また、Declerck (1991: 116) も Leech と同じような意味規定をしており、未来進行形は、(a) 進行相が含意されず、(b) 純粋な未来を表し、意図 (intention)、計画 (plan)、意志 (volition) の含意はなく、(c) 未来の状況が出来事の当然の成り行きや通常の経過として、すなわち出来事の通常のパターンの一部として起こることを表すと述べている。そして Leech (2004: 67) は、この未来進行形の意味は、助動詞 will の「予測」の意味と、進行形の「進行中」(in progress) の意味を組み合わせたものではなく、むしろ、will の「予測」の意味と、未来時を表す現在進行形が持つ「取り決め」(arrangement) の意味を組み合わせたものであると述べている。この点については、第4章で考察する。

次に未来進行形と「will/shall + 原形動詞」の意味を比較してみる。(7) を見てみよう。

- (7) a. I'll drive into London next week.
 b. I'll be driving into London next week.
 c. Will you put on another play soon?
 d. Will you be putting on another play soon?

Leech (2004: 67)

(7a) は、純粹に予測の意味で使うこともできるが、普通は「私は来週ロンドンへ車で行くつもりだ」という意図の意味で解釈される。一方、(7b) の未来進行形は、意図の意味を含んで解釈されることはなく、「私は来週ロンドンへ行くことになるだろう」という「当然の成り行き」の意味で解釈される。同様に(7c)は、聞き手の意図を尋ねていると解釈され、「新しい劇を出してください」と聞き手に対していくらか圧力をかけて命令するという含みが感じられる。一方 (7d) の未来進行形には意図の含みはなく、「そのうち新しい劇が出ますか」と情報を求めているだけなので、(7c) よりも心配りのきいた丁寧な質問になる (Declerck 1991: 166, 柏野1999: 98, Leech 2004: 68)。

3. 英語の現在時制、法助動詞 will、進行形の認知的意味

3.1 現在時制の認知的意味

次章で進行形を含む未来指示の形式の意味を認知的な視点から考察する準備として、本章では、それらの形式を構成している現在時制、進行形、法助動詞 will の意味が、Ronald Langacker の認知文法においてこれまでどのように分析されてきたかを述べる。

まず認知文法の枠組みでは、英語の現在時制は、プロファイルされるプロセスが発話の時間に一致していることを示す形式であると分析されている (Langacker 2008: 157, 534)³⁾。多くの場合はこの説明が当てはまるが、現在時制は (8) のように、未来の事態、過去の事態、時間を超越した事態をプロファイルすることもある。

- (8) a. The party starts at midnight. [scheduled future]
 b. I get home last night and see a note on my door. [historical present]
 c. A kitten chases a piece of string. [generic] Langacker (2008: 534)

(8a) は「予定未来」、(8b) は「歴史的現在」、(8c) は「総称性」と呼ばれる用法である。このような現在時制の非現在用法は、Langacker の理論では次のように説明される。まず、この用法においてプロファイルされている事態は全て「仮想的」なものである。(8a) の「予定未来」は、スケジュールや計画を心的に探索して、定められた時間にこの出来事が起こるだろうということを頭の中でシミュレートしていることを表している。実際の出来事は未来に起こるが、そのシミュレートが発話時間と一致しているために現在時制が使われるのである。また (8b) の「歴史的現在」の場合は、記憶を通して再現可能な過去の出来事を、発話時間にシミュレートしていることを示している。(8c) の「総称性」の場合も、私たちの頭の中にある、世界のありようについての文化モデルを発話時間に喚起し、その中の情報を読み取っていることを示している (Langacker 2008: 534-535)。

³⁾ プロファイル (profile) とはある概念内容の中で、注意の焦点として際立っている部分のことである。これは言語表現が直接指す対象でもある (Langacker 2008: 66, 辻 2002: 227)。また、プロセス (process) とは、把握時間上に展開し、その軸上で連続的にスキャンされる複雑な関係である (Langacker 2008: 112)。把握時間 (conceived time) とは概念化の対象となる時間のことであり、複雑な関係とは、複数の構成的な関係から成り、典型的には連続的な期間に連続して現れるものである (Langacker 2008: 79, 109)。

また (9) のように、条件や時を表す従属節でも、現在時制によって未来が表される。

(9) a. I'll tell you if it hurts.

b. When the spring comes, the swallows will return.

Leech (2004: 63)

条件や時を表す従属節内で現在時制が使われる理由については、これまで様々な方法で説明されてきたが、この場合の現在時制も、プロファイルされているのが未来の現実ではなく、発話の時間にアクセス可能な、即時的現実（現在の世界についての話者の知識）に含まれる仮想的な事態（シナリオやプラン）であることを示しているという Langacker (2007) による説明が最も妥当であると思われる（松井2012）。

以上のように、現実のものであれ仮想的のものであれ、英語の現在時制はプロファイルされるプロセスが発話時間と一致することを示している。

3.2 法助動詞 will の認知的意味

法助動詞には、(10a) のような義務、許可、意図、能力などを表す根源的 (root) 用法と、(10b) のような可能性、必然性、蓋然性などを表す認識 (epistemic) 用法がある。

(10) a. She absolutely will not sign the waiver.

Langacker (2008: 305)

b. This election (may/will) be very close.

Langacker (2008: 307)

本稿の議論に関連があるのは認識用法の will なので、この用法の will について説明する。図3.1が示すように、認知文法の枠組みでは、認識用法の will はグラウンディングされたプロセス（時間軸上に展開する一連の状況から成る関係）を「投射された現実」(projected reality) に位置づけるものであると規定されている (Langacker 2008: 307)。

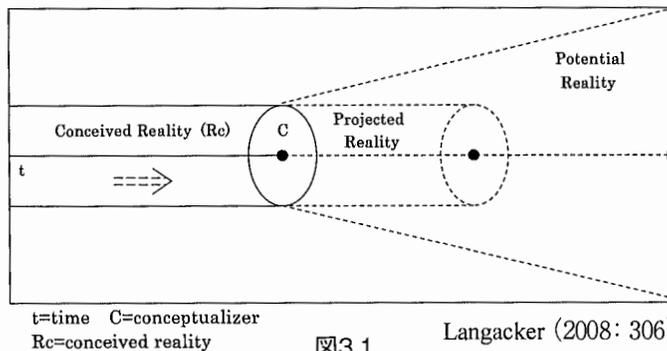


図3.1

認知文法において「グラウンド」(ground) とは、発話事態、発話事態の参与者（話し手と聞き手）、話し手と聞き手の相互作用、直接的な環境（とりわけ発話の時と場所）を指す。そしてグラウンディングとは、名詞類によってプロファイルされるモノや定形節によってプロファイルされるプロセスを、グラウンドに位置づける認知作用のことである。グラウンディングは、名詞類の場合は the, this, that, some, a, each, every, no, any など、定形節の場合は -s, -ed, may, will, should などのグラウンディング要素によって表される (Langacker 2008: 259)。また「投射された現実」とは、概念化者 (conceptualizer) が、物事が展開していく経路を推定する際に、可能性が排除されないいくつかの展開の経路（潜在的に可能な現

実 (potential reality) の中で、特に辿られやすいと見なされる経路のことである。法助動詞は、グラウンディングされたプロセスがまだ現実のものではないことを表すので、未来志向である (Langacker 2008: 306-307)。

3.3 進行形の認知的意味

認知文法では、進行形の意味は、be の意味と現在分詞の意味の組み合わせによって生ずると考えられている。この点を、Langacker (1991: 207-211, 2008: chs. 3-5) に基づいて説明する。まず現在分詞は、(11a) のように進行形の一部、(11b) のように名詞修飾要素、(11c) のように文副詞として使われる。

(11) a. A monkey is climbing the tree.

b. The monkey climbing the tree is very cute.

c. Climbing the tree, the monkey lost its grip.

Langacker (2008: 120)

(11) にみられるような現在分詞には、共通して3つの大きな特徴があると考えられている。その第一番目は、動詞が表すプロセスを全体的に解釈する (連続的ではなく一括的にスキャンされる) ことによって、プロファイルされた関係を非プロセス的にするというものである⁴⁾。ここで非プロセス的とは非時間的ということであり、時間軸上の展開が背景化されるということである。現在分詞の第二番目の特徴は、「内的なパースペクティブ」を取り、関係全体の中の一部に時間の直接スコープが課され、その部分だけが視野の焦点として選ばれ、プロファイルされるということである。これは事態全体の一部だけに焦点があてられるということである。第三番目の特徴は、そのようにしてプロファイルされた部分が均質的 (homogeneous) に解釈されるということである。このことは変化を表す動詞にも当てはまる。変化を表す動詞のプロセスを構成している個々の状態は違っていても、ある抽象レベルで見れば、それらの状態は同一的に捉えられるのである。

さて、認知文法では、進行形を構成しているもう一つの要素である be 動詞の意味は次のように規定される。まず、be は動詞なので、他の動詞と同じように、モノではなくプロセスをプロファイルする。しかし be 動詞がプロファイルするプロセスはスキーマ的、すなわち非常に抽象的なものである。そして be 動詞はプロセスをプロファイルするのであるから、その概念内容には時間性 (把握時間上の連続スキミング) という特徴が含まれている。

動詞は、それが表すプロセスが時間的に解釈されるが、動詞から派生した現在分詞の場合は、それが表すプロセスは非時間的に解釈される。しかし、be が現在分詞と組み合わせられると、be のプロセス的 (時間的な) なプロファイルが、現在分詞が表す非プロセス的な概念内容に与えられる。つまり、元々非時間的な概念内容であった現在分詞は、be と組み合わせられることによって、時間性が与えられるのである。

結局、元の動詞もその動詞から派生した進行形も時間的なプロセスを表すが、図3.2に示されているように、進行形の基盤となる動詞は完了 (perfective) のプロセスを、進行形は未完了 (imperfective) のプロセスをプロファイルするという違いがある。完了は時間軸上で区切られており、プロファイルされた関係は、内部が非均質的で何らかの時間的な変化を含ん

⁴⁾ 言語表現はモノ (thing) か関係 (relationship) のどちらかを表す (Langacker 2008: 67)。モノや関係など、概念構造を記述する際に用いられるあらゆる概念のことを存在 (entity) という (Langacker 2008: 98)。モノとは「グループ化と具象化によるあらゆる産物」であり、関係とは存在同士の関わり合いのことを言う (Langacker 2008: 99, 105)。

でいるという捉え方である。未完了は明確には区切られておらず、プロファイルされた関係は、均質的であり安定した状態が続いているという捉え方である。したがってここで言う完了は「時間的な変化が認識される」という意味であり、現在完了における完了とは異なる⁵⁾。

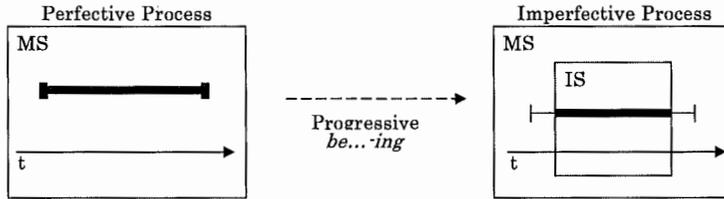


図3.2 Langacker (2008: 156)

以上が Langacker (1991, 2008) における、英語の進行形の意味についての認知文法的説明の要点だが、これをまとめると、進行形は「動詞が表す事態の一部分に焦点を当てて、その部分を変化が認識されない均質的なものと捉える」という意味を表すということになる。

4. 未来時を表す進行形の認知的意味

4.1 be going to

本章では、進行形 (be -ing) を含み未来時を指す英語の形式 (be going to、現在進行形、未来進行形) が表す意味を、認知文法の枠組みで考察する。まず be going to について述べる。2.1で述べたように、記述文法では、be going to は (12a) のような「現在の意図の未来における結果」(THE FUTURE OUTCOME OF PRESENT INTENTION)、あるいは (12b) のような「現在の原因の未来における結果」(THE FUTURE OUTCOME OF PRESENT CAUSE) を意味すると説明されている。

(12) a. I'm going to learn to fly.

b. I'm going to be a grandmother soon.

Radden and Dirven (2007: 224)

be going to が未来を指すことについては、メタファーによる説明と主観化による説明がある。まず、メタファーによる説明についてであるが、Radden and Dirven (2007: 224) によると、この形式の意味は、人が未来に向かって移動していくという時間に関する文化モデルに基づいている。つまり、TIME IS MOTION OVER LANDSCAPE というメタファーに基づいて、未来へ向かう時間の経過が、go という移動を表す動詞で表現されているのである。そして、多くの場合移動は目的志向 (goal-oriented) なので、(12a) のように移動と意志が関連づけられるのである。また、(12b) では、私たちが持っている世界についての百科事典的な知識 (フレーム的知識) に基づいて、未来の事態を予測している事が表されている⁶⁾。

⁵⁾ 図3.2において、太線はプロファイルされた部分を表し、MS は最大スコープ (Maximal Scope)、IS は直接スコープ (Immediate Scope) を表す。スコープとは認知ドメイン内で言語表現が扱う範囲のことで、最大スコープはそれが最大の場合であり、直接スコープはスコープ内で言語表現が直接関係している部分のことである (Langacker 2008: 62-63)。

⁶⁾ 認知言語学では、この種の百科事典知識が言語表現の意味にとって重要な役割を果たしていると考えられている。この知識は Fillmore (1977) では「フレーム」、Lakoff (1987) では「理想化認知モデル」(Idealized Cognitive Model)、Langacker (2008) では「認知領域」(cognitive domain) と呼ばれているが、これらはほぼ類似した知識を指す。

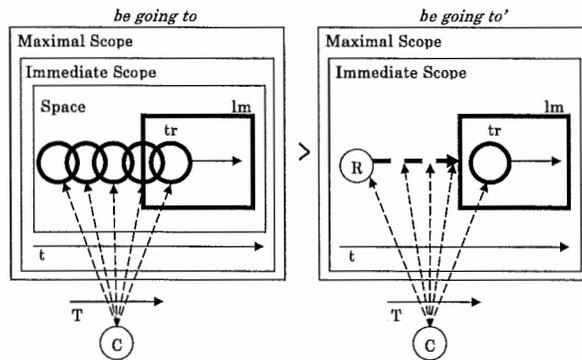
この文に関連しているのは、妊娠した女性は通常は出産することになるという、生殖に関する知識である。

一方、Langacker は主体化 (subjectification) の観点から、be going to に見られる移動の意味から未来の意味への拡張を説明している。主体化とは元々の客体的意味が希薄化して、それに内在していた主体による概念操作に関わる主体的意味が顕在化してくることである (Langacker 2000: 297-299)。(13) を見てみよう。

(13) Sam is going to mail the letter.

(Langacker 2000: 302)

この文は、(a) 主語の指示対象による空間内の物理的移動という解釈と、(b) 概念化者による時間内の主観的移動という解釈が可能である。(b) の場合には、空間移動は全く含意されず、不定詞で表された事態の未来性が示されている。(a) の場合、概念化者はトラジェクター (主語の指示対象) の物理的移動を空間的にスキャンしていくのと同時に、そのトラジェクターの移動を時間的にもスキャンしていくことになる。そしてトラジェクターの物理的移動の意味が希薄化すれば、概念化者による時間軸上の心的スキャンが顕在化してくる。このような、<空間的移動>から<時間的な心的スキャン>という方向への「移動」の主体化によって、(a) の意味から (b) の意味へ拡張したのである。つまり、be going to は未来の意味を表す場合、時間的経路を辿る心の働きを表しているのである (図4.1)。



R=a reference point

図4.1

Langacker (2000: 363)

Langacker は、このような主体化に基づく説明には空間的な領域から時間的な領域へのメタファーは関わらず、元々の意味の中にあった時間的な関係が顕在化してくるだけであると述べている。また、be going to の主語が時間的経路をメタファー的に移動しているのではなく、概念化者が時間的経路を主体的、心的に移動していると述べている (Langacker 2000: 394)。

筆者は、以上のような be going to の未来の意味についてのメタファーによる説明と主体化による説明は、完全に相互排他的なものではなく、両立可能であると考ええる。主体化に基づく意味拡張に関する説明は基本的に正しいと思われるが、元々の意味の中にも概念化者による時間軸上の心的スキャンが含まれていると考えれば、時間を経路や軸といった空間的概念で理解しているのであるから、そこにはメタファーが関わっていると言わざるを得ない。従って、物理的な空間移動の意味にも、未来時の意味にも、メタファーは関わるのである。

さて be going to が時間軸上の心的スキャンを表すと考えれば、この形式が未来時を指すことは説明できるが、この形式が特に「意図未来」と「原因未来」を表すということまでは説明できない。これについては、Radden and Dirven (2007: 224) も述べているように、「フレ

ーム]、「理想化認知モデル」、「認知領域」などと呼ばれる世界についての百科事典的知識が関わる。空間を物理的に移動するものには様々なものがあるが、その中でも最も典型的なものとは生物であろう。生物は内的な欲求から、すなわち自分の意図で動くこともあるし、外的な要因によって強制されて動くこともある。私たちはそのような移動に関する知識を持っているため、be going to の意味が主体化して未来の意味を表すようになって、その意味に「意図」や「原因」という意味を結び付けるのだと考えられる。

4.2 現在進行形

次に現在進行形についてであるが、2.2で見たように、記述文法では現在進行形は「取り決め」(arrangement)に基づく未来を表すと説明されている。(14)を見てみよう。

(14) We're getting married in spring. Radden and Dirven (2007: 226)

現在進行形の意味にも、世界に関する百科事典的知識が関係している。例えば私たちは、「結婚」について、両親への報告、婚約の発表、結婚式の準備、結婚式など、実際に婚姻届を提出して結婚に至るまでに一連のプロセスがあることを知っている。すなわち私たちが持っている特定の事態に関する概念(フレーム的知識)には、中心のプロセスとそれに至るまでのプロセスに関する様々な知識が含まれている。図4.2に示されているように、未来時を指して現在進行形が用いられる場合、動詞と結びついたそのような概念が喚起されるため、動詞がプロファイルするのは、その動詞が通常プロファイルする中心のプロセスと、そのプロセスに至るまでの前段階的なプロセスという2種類のプロセスであると考えられる。前者のプロセスの方が認知的に際立つのでトラジェクター、後者のプロセスがランドマークだと言える⁷⁾。(14)の場合には、前者は結婚式を挙げて婚姻届を提出するというプロセス、後者は両親への報告、婚約の発表、結婚式の準備など実際の結婚に至るまでのプロセスである。そして3.3で見たように、英語の進行形は「動詞が表す事態の一部分に焦点を当てて、その部分を変化が認識されない均質的なものと捉える」ことを示す。(14)のような未来指示の現在進行形の場合、ランドマークとしてのプロセスの一部に焦点が当てられ、その部分が均質的に(未完了的に)解釈される。トラジェクターとしてのプロセスは、完了プロセスのままである。未来時を表す現在進行形では、そのようなランドマークとしてのプロセス(14)の場合ならば結婚に至るまでのプロセス)が、意味の中に取り込まれるので、「取り決め」という意味を含むのだと考えられる。

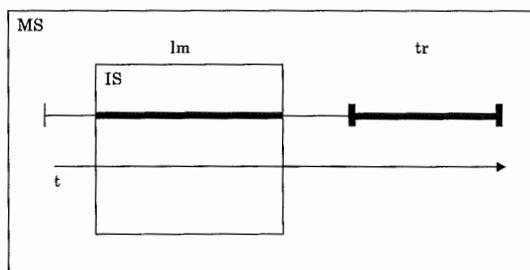


図4.2

⁷⁾ Langacker は、言語表現が表す「関係」に参加しているもののうち、最も際立つ参加者をトラジェクター (trajector)、2 番目に際立つ参加者をランドマーク (landmark) と呼んでいる (Langacker 2008: 70-73)。

4.3 未来進行形

さて、最後に未来進行形の意味について認知的な視点から考えてみる。2.3で述べたように、未来進行形には2つの意味がある。その一つは、(15)のように特定の時点において何かが進行しているというもので、これは第3章で見た法助動詞 *will* の意味と進行形の意味を組み合わせることで得られる。

(15) a. This time next week they will be sailing across the North Sea.

b. Don't phone me at 7 o'clock – I'll be watching my favorite TV programme.

Leech (2004: 66)

これを認知的な視点から述べると、この用法の未来進行形は、「投射された現実」内に位置付けられたプロセスの一部に焦点が当てられ、その部分が均質的に解釈されることを示しているということになる。

問題は、(16)に見られる未来進行形が持つ「当然の未来」(FUTURE-AS-A-MATTER-OF-COURSE) という意味である。

(16) a. Jessy Norman's tour is almost done. She'll soon be leaving for good.

b. Don't worry, we'll be handling all your problems tomorrow.

Radden and Dirven (2007: 225)

2.3でも述べたが、この用法の未来進行形は、(a) 進行相は含意されず、(b) 純粋な未来を表し、意図 (intention)、計画 (plan)、意志 (volition) の含意はなく、(c) 未来の状況が出来事の当然の成り行きや通常の経過として、すなわち出来事の通常のパターンの一部として起こることを表す (Declerck 1991: 116)。なぜ完了を未完了に転換する働きのある進行形を含む未来進行形が、このような進行相を含まない意味を持つのであろうか。Leech (2004: 67) は、この未来進行形の意味は、*will* の「予測」の意味と、未来時を表す現在進行形が持つ「計画」や「取り決め」の意味を組み合わせたものであると述べている。確かに未来進行形が未来時を表すのは *will* の意味から説明できるが、「計画」や「取り決め」には「意図」や「意志」を伴うのが普通であるから、未来進行形における「計画」や「取り決め」は、主語の指示対象以外のものによる「計画」や「取り決め」でなければならない。そして、現在進行形の場合と同じように、未来進行形の動詞がプロファイルしているのは、トラジェクターとしての完了プロセス ((16) の場合は *leave* と *handle* という動詞が表すプロセス) と、そのプロセスに至るまでのランドマークとしてのプロセスの両方であり、後者の前段階的なプロセスはその一部に焦点が当てられ、その部分が均質的に (つまり未完了として) 解釈される。この解釈の反映として、未来進行形に「計画」や「取り決め」という意味が含まれていると考えられる。しかし、トラジェクターとしてのプロセス自体は完了プロセスのままなので、このプロセス自体には進行相の意味は含まれない。ここから未来進行形の進行相を含まない意味が得られると考えられる。そして、未来進行形が現在進行形と異なる点は、法助動詞 *will* によって、未来進行形でプロファイルされているプロセスが、発話時ではなく未来の時点に位置づけられているという点である。例えば、(16a) の動詞 *leave* がプロファイルするプロセスと、(16b) の動詞 *handle* がプロファイルするプロセスは、未来時に位置づけられているということである。

5. 結論

本稿では未来時を表す様々な形式の意味を考察し、特に進行形を含む形式 (be going to、現在進行形、未来進行形) の意味を認知的な視点から分析した。その結果、be going to の意味には、時間を空間的な経路に喩えるメタファーと概念化者の心的なスキャンが関わっており、動詞 go は時間軸上での心的なスキャンを表していると考えられる。通常、生物の物理的移動は内的な要因か外的な要因によって引き起こされるので、be going to の意味にもそれに応じて「意図」あるいは「原因」という意味が含まれるのだと考えられる。

また現在進行形の「取り決めに基づく未来」という意味は次のように得られる。現在進行形では、動詞が通常プロファイルするプロセスと、そのプロセスに至るまでのプロセスの両方がプロファイルされ、前者がトラジェクター、後者がランドマークとして解釈される。そして進行形によって後者のプロセスの一部が焦点化され、その部分が均質的に解釈される。そのような方法で、動詞が通常プロファイルするプロセスに至るまでの前段階としてのプロセスがプロファイルされるので、「計画」や「取り決め」という意味が生じると考えられる。

未来進行形には、進行相を含む意味と、それを含まない「当然の未来」という意味がある。後者の意味の場合、現在進行形と同じように「計画」や「取り決め」の意味が含まれるが、それは主語の指示対象以外の人による「計画」や「取り決め」である。さらに、動詞が通常プロファイルするトラジェクターとしてのプロセスと、そこに至るまでのランドマークとしてのプロセスの両方がプロファイルされ、前者のプロセスは完了、後者のプロセスは進行形によって未完了として解釈される。この前者の完了プロセスがトラジェクターとしてプロファイルされるため、未来進行形は進行相を含まない意味を持つのだと考えられる。ただし、現在進行形とは異なり、未来進行形の場合は、動詞がプロファイルするプロセスは、法助動詞 will によって未来時に位置づけられている。

以上のように、本稿で考察した進行形を含む各々の形式の意味には、未来時に対する様々な捉え方が反映しているが、その形式と意味の結びつきは決して恣意的なものではなく、それらの形式を構成している動詞 go、法助動詞 will、進行形 (be -ing) という形式のそれぞれ意味に動機づけられていると言える。

参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』東京：開拓社。
- Declerck, Renaat (1991) *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Fillmore, Charles J. (1977) Topics in lexical semantics. In: Roger W. Cole (ed.) *Current issues in linguistic theory*, 76-138. Indianapolis: Indiana University Press.
- Jespersen, Otto (1931) *A modern English grammar on historical principles, Part IV*. Copenhagen: Munksgaard.
- 柏野健次 (1999) 『テンスとアスペクトの語法』東京：開拓社。
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the world*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar, Volume II, Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2000) *Grammar and conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2007) The present tense in English adverbial clauses. In: Władysław Chłopicki, Andrzej Pawelec, and Agnieszka Pokojńska (eds.) *Cognition in language: Volume*

- in honor of Professor Elżbieta Tabakowska*, 179-209. Craców: Tertium.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in cognitive grammar*. New York: Oxford University Press.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English verb*. Third edition. Harlow: Person Education Limited.
- 松井真人 (2012) 「英語の未来指示の副詞節における現在時制について」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』 39: 15-23.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey N. Leech, and Jan Svartvik (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Radden, Günter and René Dirven (2007) *Cognitive English grammar*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Swan, Michael (2005) *Practical English usage*. Third edition. Oxford and New York: Oxford University Press.
- 辻幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』 東京: 研究社.